

平成 28 年 (2016 年) 9 月 24 日、25 日は日本口腔顔面痛学会にとって記念すべき日になりました。第 21 回学術大会が開催されたことはもちろんですが、第 16 回アジア頭蓋下顎機能障害学会 (AACMD) 学術大会と 2016 年国際疼痛学会 (IASP) 口腔顔面痛 Special Interest Group 学術大会が、International Congress of Orofacial Pain (ICOP) 2016 として共同開催されました。2 日間にわたってアジア各国からの研究者と世界各国からの研究者が集い、参加者は新しい知見に興奮し、世界の口腔顔面痛の流れを確認するという大変有意義な 2 日間となりました。広報委員の山崎先生と野間先生にご協力いただき、2 日間にわたる学会の様様をお届けします。

## 第 21 回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告 (9 月 24 日午前)



大会長 岩田幸一先生の開会式挨拶

この最初のセッションは比較的基礎的な内容であったが参加者の関心は高く、会場は早くも満員であった。

続いてのセッションは、今最もこの領域で注目されているトピックである「神経障害性痛」がテーマであった。ここでは東京歯科大学の福田謙一先生が座長を務められ、日本大学歯学部



片桐綾乃先生の講演風景

が「舌痛発症の末梢神経機構」のテーマで舌痛と神経障害性疼痛の関わりについて、また岡田明子先生が「中枢神経系における神経障害性痛発症メカニズム」のテーマで神経障害性痛発現時における中枢側の変化について講演された。この頃には会場は立ち見が出るほど満席の状況であり参加者の関心の高さが伺えた。また福田先生ご自身も「口腔顔面領域神経障害性疼痛の臨床」について、ご自分の臨床例と共に講演され、臨床家にとっても参考になるセッションとなった。

口腔顔面痛学会と併行して、アジア頭蓋下顎機能障害学会の英語のセッションでは、アジア各国での顎関節症と口腔顔面痛に関する教育プログラムのシンポジウムが開催されていた。



柿木隆介先生の講演風景

第 21 回日本口腔顔面痛学会学術大会 1 日目の午前には、開会式での大会長である日本大学歯学部の岩田幸一先生の挨拶から始まった。

初日は教育講演のプログラムであり、最初のセッションは「侵害受容性痛」のテーマで、岩田幸一先生の座長のもと、日本大学歯学部の篠田雅路先生が「末梢神経系における口腔顔面痛の伝達機構」について、また松本歯科大学の北川純一先生が「侵害受容性疼痛 — 中枢における侵害受容メカニズム —」について講演された。この最初のセ



北川純一先生の講演風景

シウムが開催されていた。また福田先生ご自身も「口腔顔面領域神経障害性疼痛の臨床」について、ご自分の臨床例と共に講演され、臨床家にとっても参考になるセッションとなった。

口腔顔面痛学会と併行して、アジア頭蓋下顎機能障害学会の英語のセッションでは、アジア各国での顎関節症と口腔顔面痛に関する教育プログラムのシンポジウムが開催されていた。

また共通のランチョンセミナーは、自然科学研究機構生理学研究所の柿木隆介先生が「Understanding of Pain from Brain Activity」というタイトルで講演され、活発なディスカッションが行われた。

文責 小見山



岡田明子先生の講演風景

# 第 21 回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告（9月24日午後）

東京医科歯科大学 口腔顔面痛制御学分野 山崎陽子

第 21 回日本口腔顔面痛学会学術大会一日目の午後は、防衛医科大学の田代晃正先生と徳島大学の松香芳三先生に御講演いただいた。



田代 晃正 先生

最初は田代先生に「顎関節痛の痛み一性差発現のメカニズム」という内容でお話いただいた。顎関節痛を発症する患者に女性が多いことは、臨床を行っている歯科医師が実感していることであるが、基礎的な観点からなぜ女性が多いのかを御説明いただいた。動物実験のデータを供覧しながら女性ホルモンと中枢神経系の機能との複雑な関係を分かりやすく勉強することができた。

次に、松香先生に「顎関節痛を訴える患者の診断とマネジメント」という内容で、お話しいただいた。臨床で顎関節痛を

診断するにあたり、顎関節痛を発生する顎関節の疾患や障害に加え、全身疾患や精神神経学的疾患などの幅広い知識を蓄えておくことが重要であると感じた。現在使用されている診断基準についても御説明があり、顎関節痛の診断の難しさを痛感した。

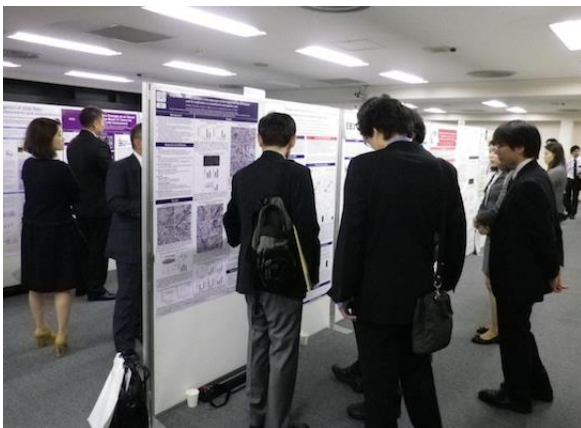
講演終了後、ポスター発表会場にてフリーコミュニケーションが行われた。約 70 演題のポスター発表があり、今回は第 16 回アジア頭蓋下顎障害学会学術大会も同時開催であるため、国外の発表者のポスターも閲覧できた。話題



座長も務められた松香 芳三 先生

は基礎から臨床まで様々で、どのポスターも簡潔に分かりやすくまとめられていた。来場者は各々興味を引かれるポスターの前で立ち止まり、熱心にポスター内容を熟読していた。開始から数分後には、いろいろなポスターの前で活発なディスカッションが行われ、時間を過ぎても議論が尽きない所もあった。

他の学会と共催であると、日頃の自分達の視点とは異なる発表に数多く触れることができる。新たな研究のきっかけを発見した先生もいたのではないだろうか。



ポスター会場でのディスカッション風景

追記：初日午後の最初は 3 学会の会員全員と対象とした全体講演が行われ、トロント大学の Barry Sessle 先生が講演された。またポスターフリーコミュニケーション後には、3 学会合同の全体シンポジウムが開催された（右写真）。テーマは「Brain as a Therapeutic Target in Orofacial Pain」であり、Dr. Eli Eliav, Dr. Gary Heir と Dr. Rafael Benolie による講演と活発なディスカッションが行われた。文責：小見山



合同の全体シンポジウムでのディスカッション風景



# 第21回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告（9月25日午前）

日本大学歯学部口腔診断学講座 野間 昇

平成28年9月25日（日）に行われた第21回日本口腔顔面痛学会学術大会午前の部を報告する。午前の部では教育講演IV「Photophobiaの神経機構（神経メカニズム）」を新潟大学歯学部の岡本圭一郎先生より御講演いただいた。Photophobiaは光刺激による目の不快症状であり、片頭痛やドライアイ患者等でみられ、その脳神経機構の解明について説明された。具体的には光による目の不快症状を電気生理学的実験により、①眼球内の血管運動の障害が三叉神経脊髄路核尾側亜核（Vc）の興奮性の低下に関与し、②副交感神経の眼球への出力がVcの興奮性の増大に関与につながり、③脳内視覚回路の活性が三叉神経回路の興奮性の増大に関与することを説明された。会場から、三叉神経刺激後に交感神経興奮性が増強するメカニズムや、三叉神経自律神経性頭痛と目の不快症状に関する質問が多数あった。



教育講演で発表された北原 功雄先生

についてビデオを供覧し、痛みの再現性の重要性、診査・診断、脳神経スクリーニングの必要性についても解説した。また、2013年に改訂された国際頭痛分類第3版（ICHD3beta）の有痛性脳神経ニューロパチーの新分類、ICHD2との変更点についても説明させていただいた。

最後にJS-V-3「三叉神経痛の治療と頸椎からの顔面痛」について千葉徳洲会病院 脳神経外科の北原功雄先生に御講演いただいた。典型的三叉神経痛の診断は、発作性電撃様疼痛などの痛みの性質を聴取することが重要で、その他にも頭の形、患者の年齢、性差も鑑別する上で重要なポイントになると強調された。脳神経外科の立場から、三叉神経痛の治療法（微小血管減圧術、脳腫瘍摘出術）についてビデオを供覧して分かりやすく解説していただき、三叉神経周囲の微小血管などの解剖学的構造や、神経と血管の位置関係、三叉神経の生理学的特徴について理解を深めることができた。教育講演V終了後、会場から豊福先生には三環系抗うつ薬の具体的な使用方法について、野間には前三叉神経痛の鑑別方法について、北原先生には頸椎からの顔面痛を誘発させないための歯科医師ができる対応について質問があった。25日午前の部（教育講演）は口腔顔面痛の基礎から臨床までと幅広い内容であったが、会場には多くの先生方が参加し、立ち見がでるほど盛況であった。

休憩をはさみ、教育講演V「痛みの治療」JS-V-1「Chronic Oral Painに対する抗うつ薬の使い方」について東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科の豊福明先生に御講演いただいた。舌痛症、非定型歯痛に対する三環系抗うつ薬、SSRI、SNRIの使用法、患者の長い話を聞かない方法、精神疾患の簡易的スクリーニング方法について説明された。その後、JS-V-1「口腔顔面領域の神経障害性疼痛の診断と治療」について野間から講演させていただいた。三叉神経痛の診断方法、治療法につ



教育講演；質疑応答と会場風景

## 第 21 回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告（9月25日午後）

第 21 回日本口腔顔面痛学会学術大会 2 日目午後は、昼食時にポスターのフリーコミュニケーションとポスター賞受賞者による口頭発表が行われ、受賞者はその榮譽に相応し発表を行った。



井川雅子先生の講演風景

に関する各種原因疾患の処方を中心とした内容であった、ここでは東北大学歯学部佐々木啓一先生と東京医科歯科大学の嶋田昌彦先生が座長を務められた。最初に小見山が、「口腔顔面痛総論と筋・筋膜性歯痛への対応と処方」のテーマで、口腔顔面痛という用語が一般的になった経緯や口腔顔面痛に関する総論と筋・筋膜性歯痛に関する臨床例



佐久間泰司先生の講演風景

について、処方を含めて説明した。次いで川崎市立井田病院の村岡 渡先生が

その後、一般の歯科医師にも聴講いただけるように公開講座として歯科医師会セミナーが開催された。テーマは「口腔顔面痛総論から非歯原性歯痛の診断と治療、具体的症例の診断と治療」であり、主に歯科医師会の先生方や開業医の先生方を対象とした、非歯原性歯痛



熱気あふれるポスター会場

「外傷後痛性三叉神経ニューロパチーによる歯痛と末梢性神経障害性疼痛としての舌痛への対応と処方」について、さらに静岡市立清水病院の井川雅子先生が、「三叉神経痛と帯状疱疹性歯痛への対応と処方」について講演した。最後に大阪歯科大学の佐久間泰司先生が「各種薬剤の使用と、処方時の注意点」について講演された。



村岡 渡先生の講演風景

「外傷後痛性三叉神経ニューロパチーによる歯痛と末梢性神経障害性疼痛としての舌痛への対応と処方」について、さらに静岡市立清水病院の井川雅子先生が、「三叉神経痛と帯状疱疹性歯痛への対応と処方」について講演した。最後に大阪歯科大学の佐久間泰司先生が「各種薬剤の使用と、処方時の注意点」について講演された。

2 日目は口腔顔面痛学会と併行して、2016 年国際疼痛学会口腔顔面痛 Special Interest Group (IASP OFP-SIG) 学術大会の英語のセッションが行われた。こちらは世界の第一線で活躍する口腔顔面痛のスペシャリストが集結して、興味深いトピックについて交代で丸一日講演を続けるというものであった。したがって、会場はアジアからの参加者多数も交えて真の国際学会の様相を呈しており、会場の中では、ここが日本であることを一瞬忘れるほどの大盛況であった。



大盛況の IASP OFP-SIG の講演風景



IASP OFP-SIG の講演メンバー

もちろん、ここに紹介させていただいた先生方だけでなく、ご登壇いただいた数多くの先生方の素晴らしい講演で、第 21 回口腔顔面痛学会学術大会は大盛況となり、興奮冷めやらぬ中の閉会式で 2 日間の幕を閉じた。

終了後には、ICOP 準備委員長の日本大学歯学部の今村佳樹先生と AACMD 会長の慶応大学の和嶋浩一先生のもとに、口腔顔面痛学会の歴史に残る素晴らしい国際学会であったとの感謝の声、国内はもちろん海外の先生方からも多数届いていた。

文責 小見山